

# 2020年度 神戸大学 前期 国語

一

## 問一

文学における古典とは、時代を越えて読まれ続け、過去とは異なる文学経験と文学概念を持つ現代人が享受したいと思う新しい機能や要素が潜在する作品だけであるということ。(80字)

## 問二

文化の中断もなく民族としての同質性が保たれた日本の文学は、他民族にない独特の連続性をもつので、日本の古代文学史の記述は、今までにない文学史の試みになりうるから。(80字)

## 問三

特定の作品をその形態を無視して読むことは、歴史の内部で働き歴史と共に動く文学の各ジャンルが、固有の機能を持つことを看過し、差異を混同する方法であるということ。(79字)

## 問四

文学史は、過去と現在に同時に属する古典を、複雑に入り組んだ歴史的人間活動ととらえる役目を担う。それゆえ、古代文学史も、静的に形態分類された多様な作品群ではなく、諸ジャンルが異なる時期に発生する過程と意味、また諸ジャンル相互のつながりや拮抗関係を、歴史と不可分な動的展開の軌跡として一貫的に理解するべきだということ。(157字)

## 問五

- a 次第      b 時勢      c 憧憬      d 便乗      e 消息

問二  
ハ

問二 a られ b らる c らるれ d らるる

問三

- ① 鳥羽天皇がいらっしやって
- ② 堀河天皇が御覧になったならば、どんなにか賞美なさっただろうに
- ③ 私が部屋に下がっていた時に
- ④ 私は鳥羽天皇に気づかせ申し上げないようにしようと思って、何気なく振る舞いながら

問四 生前の堀河天皇を追慕していた作者が、その遺児の鳥羽天皇に仕えている現実に一気に引き戻される状態。(48字)

問五 作者が泣いているのは亡き堀河天皇を思い出したためだと幼い鳥羽天皇が気づいていると思うにつけても、その優しさをありがたく感じたから。(65字)

三

問一

- ① かくのごときを
- ② かつて
- ③ あにうべけんや

問二

- (ア) 臣下もやはり自分の家だけを安全に保つことはできない。
- (イ) 最後まで煬帝に彼自身の過失を聞かせず、
- (ウ) 民に不利になるようなことがあれば、必ず言葉を尽くして正し諫めなければならない。

問三

隋の煬帝は暴虐さゆえに臣下に諫言させなかつたので、国が滅びるに至り、寵臣たちも殺害されたこと。

問四

隋の煬帝のように臣下を委縮させず、自分に対して臣下たちが遠慮なく諫言できるようにする意図。(四十五字)